

第七章 山車・神輿の金工

第一節 はじめに

本章にかかる山車・神輿の金工の調査は久保智康氏によって行われた。調査は、令和五年一月九日、十日、十月十三日、十四日に木造町神輿、令和六年四月十九日、二十日に山車について行い、その場で調書を作成した。その後、調査内容をもとに本章を作成する予定であったが、久保氏自身が令和六年六月に急逝された。

本章では、調査内容の重要性に鑑み、一部の表記についてご遺族の承諾を得たうえで最低限の補足・修正を行ったが、大部分は久保氏が作成された調書を第二、三節にてそのまま掲載することとした。修正・補足前の原本は岐阜市ぎふ魅力づくり推進部文化財保護にて保管している。また、事務局によって、本節でこれまで久保氏が他の報告書に記載してきた用語解説を引用し、第四節で補記を行った。

なお、本章の作成にあたり、ご遺族に調書のご提供と本書への掲載を快諾していただいた。最後まで調査にご尽力いただいた久保氏とともに、この場を借りて感謝の意を捧げる。(事務局)

■用語解説■

八双金具(はっそうかなぐ) 高欄や長押などに打つ金具で、一方の端が尖るか、もしくは二股に入り込んで八字の形をなすことから八双という。前者を出八双、後者を入八双という。

透彫り(すかしぼり) 文様もしくはその背景を透かして見せる技法。銅板か

ら文様形を鑿^{たがね}で打ち抜く技法と、糸鋸で切り抜く技法がある。山車の本体はほとんどが漆塗りで、黒や朱色の背景に金色の透彫り部分が浮かび上がり、華やかで繊細な雰囲気醸し出している。

魚々子地(ななこじ) 文様の背景に、先が円環状の鑿(魚々子鑿)を密に打ち詰めること。打ち方に時代的な特色がよく表れる。江戸時代になると、それ以前よりも概して浅い打ち込みとなり、粒の小さな魚々子を整然と並べて打つ傾向が強まる。また魚々子を三〜四個まとめた単位打ちの魚々子鑿も登場する。魚々子に近いが、円環状でなく放射線状の丸文となる菊目鑿もある。

毛彫り(けぼり) 文様の線を鑿で彫り表す技法の一つ。先の尖った鑿で素地に連続する細線を削り、彫り進める。彫り進んだだけ屑が出るのが蹴彫りと異なる。

蹴彫り(けりぼり) 文様の線を鑿で彫り表す技法の一つ。先が直線状になった鑿を素地に打ち込みながら後ろへ向って進み、その楔形の打痕を連続させて線状に見せる。へこみをつけるだけなので、彫り屑は基本的に出ない。丁寧な蹴彫りの場合には、毛彫りに見えることもあり、一見して区別がつきにくい作例も少なくない。

鍍金(とぎん) 金を水銀(現代は硝酸水銀が主流)に溶かしたアマルガムを塗り、これを火であぶって水銀を蒸発させ、金属の表面に金のごく薄い膜を定着させる技法。この銷鍍金と呼ばれる技法のほか、水銀を塗った上に金箔を乗せて、加熱して水銀を蒸発させ鍍金膜を作る箔鍍金も見られる。後者の場合、一枚の箔では薄いので、数回にわたって箔を置くのが一般的である。打出し(うちだし) 銅板を型に当て、鎚で打つことによって、金具の文様を立体的に見せる技法。打出しの程度によって、高肉に表現されたり薄肉に表現されたりする。(久保智康)



第二節 各山車の鍔金具

(一) 安宅車 (写真7-1、表7-2)

安宅車の各所に貼られた出八双金具には、透彫りで唐草 (写真7-2) 文様が表されている。葉が横長に伸び、先を尖らす特徴を示し、さらに幅広の出八双金具 (写真7-3) には、上下に葉を展開する図様を配する。中央に蕨手を向き合わせる心葉形を表すなど、総体に江戸時代には見られない図様を描く。各々の金具の図様は、同一下図を厳密に転写して切り透かす点や、葉脈を太く長く表すなど、細部表現は時代の下降を示す。金具の製作年は明治時代に下降すると判断される。

上山高欄の鼻先金具小口に見られる笹竜胆^{ささりんどう}と輪宝 (写真7-4、7-5) は、安宅車という車名にちなみ、前者が源氏 (牛若丸)、後者が武蔵坊弁慶を暗示した意匠か。



写真 7-1 安宅車



写真 7-4 笹竜胆



写真 7-2 出八双金具



写真 7-5 輪宝



写真 7-3 幅広の出八双金具

(二) 若戎車 (写真7-6、表7-13)

唐破風や高欄に貼られた八双金具には、通形つうぎょうの唐草文様からくさ (写真7-7) が表される。縦方向・横方向に間延びする傾向が顕著で、十八世紀の特徴を示す。魚々が細かい整列打ちで、打ち込みは浅い。しかし、葉と茎の輪郭の蹴彫りはやや幅広く、強い打込みで、粗い蹴りあしを連ねる点で、十八世紀には遡らない。十九世紀半ばから後半に江戸中期の金具を本歌とし、忠実に図様を再現したものと考えられる。

この若戎車は、明治二十四年まで、加納天満宮の山車であった(享和二年(二八〇二)の記録が上限)。高欄鼻先金具には、天満宮の神紋である梅鉢紋(写真7-8) が表されていることから、金具の下限は明治二十四年と考えられる。

前棚高欄のみ朱漆塗、彫物は波を意匠とし、本体と様子が異なる。支輪も同様。しかし前棚部の金具は本体とまったく同様であるため、前棚を増設したのちに作られた金具かと思われる。(久保智康)



写真 7-6 若戎車



写真 7-7 出八双金具



写真 7-8 梅鉢紋



写真 7-9 金銅装神輿



写真 7-10 出八双金具



写真 7-11 入八双金具

第三節 木造町神輿の鍔金具

(一) 本神輿

1 金銅装神輿（写真7-9） 一基

屋蓋の頂部に鳳凰をいただく鳳輦。旧露盤は別置され、木造で外側に黒い塗料を吹き付け、金具等はない。

屋蓋は、四面を黒漆塗りとし、前後面に菊、左右側面に桐をやや高肉に打ち出した金銅金具を据える。四方下り棟は金具等を打たず、漆箔仕上げとする。軒付は、金銅板を貼り、中央に出八双金具（写真7-10）、四隅に入八双金具（写真7-11）を打つ。魚々子地に左右に展開する唐草を細い繊細な蹴彫りで表す。



写真 7-12 飛檐垂木 垂木先小口金具



写真 7-13 地垂木 垂木先小口金具

茎は太く葉は丸みを帯びた牡丹葉形を呈する。葉の形と鑿彫りの作行から十七世紀前半もしくはそれ以前に製作された金具の可能性が考えられ、それが安永もしくは天保度の造立に際し、再利用されたものか。四隅金具の上面にはさらに寸の短い入八双金具を重ねる。機械的な図様の割り付けで七宝繋ぎを細かく表しており、後代の修理で補設されたものと考えられる。

軒の裏甲の外側のみ朱漆塗り。裏甲の下面から萱負軒裏、垂木、組物にかけ、総体に漆箔仕上げとする。

垂木は二重垂木。飛檐垂木と地垂木の垂木先金具は意匠を変える。飛檐垂木は、桶型入八双金具で、二種がある。一種は小口に七宝の一部の菱形文（写真



写真 7-14 獅子の彫物と長押の入八双金具

7-12)、側面には七宝繋ぎを表す。もう一種は、小口・側面とも同様の七宝繋ぎ文を表す。地垂木は小口に桜（写真7-13）、側面に唐草を表す。桜文は型鑿を用いている。側面の唐草は粗略な茎と葉の表現になる。いずれの垂木先金具も後世の修理で補設されたものである。四方の垂木先は上段が唐草、下段は小口を太極文、側面は魚々子地に唐草を蹴彫りで表す。屋根を受ける組物は三手先で、各々の先端に桶型入八双金具を打ち、小口・側面とも魚々子地に唐草を蹴彫りする。唐草文様は葉が著しく肥大したもので、四方垂木等の金具の唐草と同様、いずれも後代の補設である。



軸部の欄間腰板は、漆箔仕上げとする。四方には、朱塗り框に菊桐文の金欄を貼った襖をはめ殺しではめ込む。金欄は、下に別種の金欄がのぞくも、現状



写真 7-15 四本柱筒金具

四本柱の中央と上下端には、金欄巻風の割り付けに、七宝繋ぎを魚々子地に表す金銅筒金具（写真7-15）をはめる。中央の筒金具には、本来、菊文金具が据えられているが、現状ではその上に新しい造作の五七桐文金具を打ち重ねている。

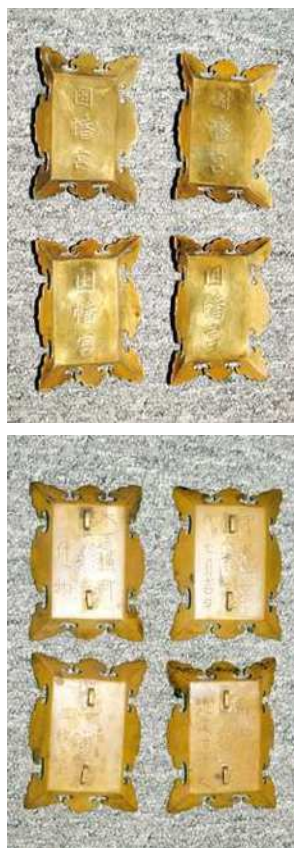
組物の上段小壁には雲文の彫刻を施した板をはめる。雲の彫り出しは、外側へ向かって高く尖らす天保から幕末期の金具の作域に通じる表現を見せる。組物の下段の間の小壁には、同様の雲文を彫り出した幕股を表す。

軸部は総体に黒漆塗りとする。台輪の中央に出八双、四隅に入八双の金銅金具を打つ。いずれも軒付の八双金具と同様の唐草を魚々子地に表し、建造段階の金具と考える。四本柱の台輪と内法長押の間には獅子の彫物を据え、四隅の各々で、阿形吽形の形をとっている。黒い目、舌の朱、総体の漆箔はいずれも修理の際に施されたものである。内法長押・腰長押には中央に出八双金具、四隅に入八双金具（写真7-14）を打つ。魚々子地に七宝繋ぎを表すが、魚々子打ちや金具側面の仕上げなどはいたって新しいため、最近の修理によるものかと思われる。

はその上に、紺地綾織に錦糸による菊桐を織り表した裂を貼る。制作時期を異にする襖が別置される。

基台の上面と上下框は総体に黒漆塗り。四方側面は横長の木瓜型の窓を透かし、枠を朱漆、窓内を黒漆塗りで表す。窓内には、波涛文に漆箔を施した彫物を枠と一材で表す。波涛はうねりが高いものの、波しぶきは抑制的に表現される。彫の凹凸は強調気味の表現になる。

上下框の中央の出八双金具、四隅の入八双金具は、長押と同様の新しい段階の補作と考えられ、七宝繋ぎ文を表す。縁板は総体に黒漆塗り。基台の外周には四方に鳥居を立て、高欄をめぐらす。笠木の屋根を黒漆とするほかは、朱漆塗りとする。いずれにも「因幡宮」（写真7-16）と太く蹴彫りする額をかける。高欄の架木・平桁・地覆の東部と親柱の両端には、七宝繋ぎ文を表す出八双金具を打つ。金具の作行は、垂木先金具と近い新しい作行で後代の修理により補設されたものかと思われる。

写真 7-16 「因幡宮」額
上：表 下：裏

以上見てきたように、この神輿は製作段階から数度にわたる修理が重ねられ、その都度金具の補設や塗り替えが行われてきたと思われる。その中でも建造当初の金具は、屋蓋軒付と軸部台輪の八双金具に限られる。

本神輿の鳳凰とらしい収納箱に安永三年の年紀が残り、当初の金具の年代観とも合致するので、本神輿の制作建造年もこの年と考える。

2 旧鳳凰（写真7-17）

頭部・頸部・体部・主翼を木造、尾羽根を金銅製とする鳳凰。

頸と胴の間に縦方向、背と腹部の間の水平方向に、はぎ合わせに由来するとみられるひびを認める。首と背のはぎ目には、補強のためか、入隅方形の銅板を打ちとめる。胴と脚の間をつなぐ部分は新材。木部は総体に漆箔を施し、古色が覆うが、細部の彫り出しがいたって甘い。当初の彩色漆箔の上に厚い下地と漆箔を再度施したものとみられる。頭頂の大きな剥落部には当初の鶏冠と見られる赤色の彩色が認められる。目は墨書き。嘴の根元に穴をあけ、太い真鍮の針金を通す。鳳凰が瓔珞ようらくを表したもののか。

胴の両側には、主翼を差し込む柄穴ぼてを大きく開ける。上方に径8mmの穴をあけ、主翼を落とし込みの線で留めたものとみられる。主翼は左右とも一材



写真 7-17 旧鳳凰 頭部・頸部・体部



写真 7-18 旧鳳凰 尾羽根（部分）のからくり留め

から彫り出し、総体に胴と同様の漆箔を施す。いずれにも文化十一年云々の墨書を認める。

尾羽根（写真7-18）は長短二種あり、いずれも銅板を切り表して組み合わせる。長い尾羽根は胴との間に、各一枚の別材をつないでいる。各々の羽根は胴寄りの位置で、多数の鋳でからくり留めする。大きく断裂した羽根は別に銅板を当て、からくり留めによる修理を施す。尾羽根の下面は、中央を魚々子地とし、その左右に綾杉状の羽文を蹴彫りする。現状で尻と脚は欠失する。

3 鏡 四面

面径17.4cm 縁高0.2cm 縁幅0.2cm

銅鑄造、鍍錫としやく。周縁部は垂直に立ち上がる。周縁外側に吊耳を作り出す。それとは別に下端近くの背面に、銅の太い針金を用いた鈕を鋳でかしめ留める。

一面のみに、鈕を留める位置のあたり線を毛書きでひく。背面には、やや粒



写真 7-19 鏡（四面のうち一面）

の大きい砂目をまとめ打ちで表す。砂目の間隔は等間隔に打たれる。四面のうち一面の下方の斜め方向の内縁付近に、鑄型の砂目を広い範囲で消した跡を認める。砂目を施刻した後に、湯口を設定しようとした痕跡かと思われる。四面共に同位置から下端にかけて、外側がわずかに凹凸をなし、



写真 7-20 鏡（部分）
「キリクチ／六寸／イ」
「キリクチ／中自イ／六寸」

あるいは内縁立ち上がりに鑄ムラを認める。これは、湯口もしくはあがりを設定した痕跡になる。吊耳の位置の周縁より約2 cm内側に、砂目を打たず、鑄型の凹みを埋めたような跡が認められるのは、注文に応じて内側背面に鈕を設けるための仕様であったか。

これらの鏡を見ると、量産を前提とした鑄型の作りで、砂目の特徴より、江戸後期十九世紀前半から半ばの制作になるとみられる。

上端の内縁近くに三行にわたり墨書（写真7-20）を認める。

三面「キリクチ／六寸／イ」

一面「キリクチ／中自イ／六寸」

4 鈴（写真7-21）

大 I 類	四個	総高11.2 cm	中帯径9.0 cm
II 類	一個	総高11.4 cm	中帯径9.0 cm
小 I 類	一個	総高10.4 cm	中帯径8.2 cm
II 類	一個	総高10.3 cm	中帯径8.4 cm
III 類	一個	総高9.2 cm	中帯径8.2 cm

大I類は下半が強く下膨れになる。上半の肩も強く張る。扁平球形で菊刻み形の座を備えた板状の鑲を持つ。大II類は、下半はやや下膨れながらI類ほど

ではなく、ほぼ球形の形になる。鑲は座を持たず、外面にやや膨らみを持つ板状。

小I類は、下半は腰がやや張り、上半はほぼ半球形。鑲は外面中ほどがやや膨らむ。II類は、下半の中ほどがやや強く張り、上半はなで肩。III類は、下半上半ともほぼ半球形である。

現状で、ハンダによる接合修理と再鍍金が施される。大I類が安政時の製作になるか。大II類はそれ以前のものか。小は花神輿もしくは子供神輿からの混入した可能性がある。大II類と小III類が最も整った猪目（いのめ）を透かす。小I類と小II類は猪目の形状を成さない。

箱書に「安政五年、云々」の墨書あり。

5 子供神輿鈴

四個 総高8.2 cm 中帯径6.7 cm

下半が強く下膨れになる。上半の肩も強く張る。扁平球形で菊刻み形の座を備えた板状の鑲を持つ。猪目は整った形になる。

箱底に安永三年の墨書銘あり。



写真 7-21 鈴（上段：大I類、下段：左から大II類、小I類、小II類）

(二) 花神輿

1 金銅装神輿 一基 (写真7-22)

この神輿の屋蓋の頂部には、十字の溝を切った高さ約10cmの木柱を立てており、宝珠を据えた座とみられ、本来は葱華輦^{そうかれん}であつたと考えられる。別置される露盤は黒漆塗で、部分的に漆箔仕上げとし、上辺の枝に花先形を刳^くっている。本神輿用の鳳凰を共有するために新造されたものかと思われる。屋蓋の十字の桁板が露出する。

屋蓋は木造の屋根板の上に、和紙を張りつめ、縁に細い棧をめぐらしている。その内側に紙で作った花を貼りつめる。当初に銅板等の装飾板を貼っていた形跡はない。屋蓋の裏面には文書の反故紙を裏張りする。軒先各面中央に出八双金具(写真7-23)四枚、両端に入八双金具六枚と正面・後面右端に出八双金具二枚(写真7-24)の計十二枚を打つ。中央出八双四枚と両端入八双三枚は、本神輿と同工の魚々子地唐草文を蹴彫りする。唐草の葉は葉先が丸く膨らみを豊かに持たせ、葉脈を明瞭に表す古様な作行を見せる(以上I類)。両端入八双金具三枚と出八双金具二枚は、江戸時代中期とみられる葉先の丸く膨らみ豊かな牡丹葉形を表す。ただし、一部の金具は上端を折り曲げたりして、他所からの移設とみられる(以上II類)。

萱負^{かやおい}は朱漆塗、四隅に金箔押しの木鼻を装飾的に取り付ける。軒下の垂木は吹き寄せの二重垂木である。小口と下面を金箔押し、側面から軒裏にかけて黒漆塗とする。組物は四隅の屋根受けのみ三手先で、小壁を含めすべて金箔を押す。小壁板の裏面には輪違、丸、四角などの記号を墨書する(番付か)。



写真 7-22 花神輿



軸部は角柱の四本柱を立てて、現状で四方ともはめ殺しの襖をはめる。台輪は金箔押し、四隅に素文金銅製の出八双金具を打つ。その下に貫を通して木鼻のみ金箔を押す。長押は、内法長押・腰長押は黒漆塗、四隅に入八双、中央に出八双形の素文金銅金具を打つ。地長押は設けない。腰長押の四隅一カ所のみ、後補の鉄製黒漆焼付金具に代わる。長押の下面に鏡を懸けるための古様な釣金具を打つ。四本柱は黒漆塗で、四隅に金箔押ししの几帳面を取る。襖は朱漆塗の縁を廻し、内側の板には亀甲地に菊と鳳凰を段違いに表した織物を張る。

基壇は黒漆塗。四本柱と上下框の隅に鉄製黒漆焼付の金具を打つ。各面にそ



写真 7-23 出八双金具 (Ⅰ類)



写真 7-24 出八双金具 (Ⅱ類)

れぞれ二本柱を立て、宝珠形の格狭間を設ける。格狭間は一段落とし込みで内側のみ金箔を押す。基壇の上縁には朱漆塗の高欄をめぐらす。親柱は頂部を擬宝珠形とする。架木、平桁、地覆は通形とするも、飾金具は現状で打たない。四面中央には鳥居を立てる。笠木のみ黒漆塗で、以下は朱漆塗とする。各鳥居には「因波宮」の鳥居額をかける。基壇を含む神輿本体を支える木枠が存在し(現状黒漆塗)、担ぎ棒(轆なぐさ)に乗せる。木枠の前後には鉄環金具を二個ずつ打つが、その作行と木部の虫損状況から花神輿の造立当初もしくは早い段階から設えていた可能性が高い。基壇柱にはわずかながら面取りを施す。

基壇を中心に黒漆塗の修理と鉄製金具の補設が行われ、担ぎ棒(轆)の内側に明治十年云々の墨書があるものの、木枠や四本柱の細工は、江戸時代に遡るとみられる。屋蓋の軒先金具のⅠ類は、江戸初期あるいはそれ以前に遡る古様さを見せ、Ⅱ類は江戸中期(十八世紀半ば前後か)の製作になる。以上のことから判断すると、現花神輿の造立は、江戸中期まで遡る可能性が高く、Ⅰ類の金具は前身の花神輿のものが再利用されたと考えられる。江戸時代後半期以後明治十年までの間の大改修を経て、現状にいたったものと考えられる。

2 鏡 四面(写真7-25)

- ① 蓬萊懸鏡「藤原光長」銘 径16・8 cm 縁高0・2 cm 縁幅0・2 cm
 - ② 蓬萊懸鏡「藤原光長」銘 径16・8 cm 縁高0・2 cm 縁幅0・2 cm
 - ③ 蓬萊懸鏡「藤原光政」銘 径16・7 cm 縁高0・15 cm 縁幅0・2 cm
 - ④ 蓬萊懸鏡「藤原光政」銘 径16・7 cm 縁高0・2 cm 縁幅0・2 cm
- 銅鑄造、鍍錫。柄鏡の柄を切り取り、円鏡に仕上げて、背面に真鍮の針金をはんだ付けして吊耳を三か所設ける。

①と②は、踏み返しによる同型鏡で、銘文まで同型である。一二重界圈を設け、外区は青海波文、内区は砂目地に亀が岩と松樹を背負い、上方に双鶴が向き合う図様の蓬萊文を表す。松樹の脇に梅竹菊を添える。砂目は細かくやや密に打つ

ており、文様の肉どりはごく薄く、鏡胎も薄手で、江戸中期の藤原光長工房の特徴をよく示している。

③は①②と同じ図様の亀を表すも、上方の双鶴を欠く蓬葉文を表す。外区には青海波文に加え、下寄りに岩礁を表す。①②よりもわずかに薄手の鏡胎で、肉どりも薄い。藤原光長と共通する藤原光政の工房の特徴をよく示している。



写真 7-25 鏡（上左：① 上右：② 下左：③ 下右④）

④は界圏を下方の土坡^{どは}より松樹、竹、南天が立ち上がり、土坡端と左上方に双鶴を表して、下方左よりの岩礁上に小さく亀を表した蓬葉文を表す。全面に打たれる砂目はごく細かく、やや密に打つ。肉どりはごく薄く、砂目の特徴からも③と同様の藤原光政工房の江戸中期の特徴をよく示す。②④のみ下端の鈕を設定するための正中のあたり線を毛書きで引く。

これらの四面の鏡は、意図的に吉祥を表す蓬葉文の柄鏡で、なおかつ薄手の特徴とする藤原光長・光政作の鏡を集めて円形鏡に仕立て直したものである。

本神輿の天保の修理銘にある「花神輿鏡四面」に該当するとすれば、鈕をつけて神輿鏡とした施工時期は同時期と見られる。

3 鈴（写真7-26）

大Ⅰ類 一個 総高10.3 cm 中帯径8.5 cm

大Ⅱ類 一個 総高10.3 cm 中帯径8.5 cm

小Ⅰ類 二個 総高9.3 cm 中帯径8.0 cm

大Ⅰ類は、下半上半ともほぼ半球形。鐙は中ほどがやや膨らみを持つ板状の環。大Ⅱ類は、下半

の中ほどがやや張り、上半はなで肩。板状の鐙。小Ⅰ類は、下半はほぼ半球形、上半はやや扁平な半球形。中ほどに膨らみを持つ板状の鐙。

大Ⅰ類は本神輿小Ⅲ類とほぼ同形。猪目は大Ⅰ類と小がしつかりとした猪目を透かす。大Ⅱ類は猪目の形状を成さない。

箱書きに安永三年の名があるものの、現鈴はいずれも仕切りの内寸より小さいため、本来の箔とは異なる可能性がある。



写真 7-26 鈴（左から大Ⅰ類、大Ⅱ類、小Ⅰ類）



(三) 獅子神輿

1 獅子神輿 一基 (写真7-27)

屋蓋を切妻造、平入とする神輿。大棟は黒漆塗の箱棟とし、頂にやや丈高い棟木を渡す。箱棟側面には菊・桐紋の金具を各一枚ずつ両面に打っている。菊の花弁輪郭、桐の葉脈は細く浅い毛彫りで、菊の蕊は大粒の魚々子を打ち詰める。大棟の前後に金箔押ししの鬼板を立て、雲形の長い脚まで一体に作る。屋根は左右各面三枚板を矧ぎ、総体に漆で塗り固めている。矧ぎ目に布着せ等を行わず、現状で亀裂を生じる。左右各面に各一枚ずつ菊・桐の薄肉大型金具を打つ。真鍮板製で、葉脈等はやや粗く太めの毛彫りで表し、菊紋の上面には黒い塗料で桜花を表している。

屋根の前後降り棟は棚葺風^{とちぶ}に作り、金箔を押す。けらばは黒漆塗で、破風板も黒漆塗で坪みと左右下端に入八双金具、中間に出八双金具を打つ。前後軒付中央に出八双金具(正面は欠失)、前後両端から破風側に入八双金具を打つ。以上の金具は魚々子地に菊唐草を表している。図様はいたって粗い表現で、蹴彫り線も稚拙の観を免れず、魚々子もやや間の開く詰め打ちをする。正面向かって右側の軒付入八双金具(写真7-28)のみ、古い入八双金具(二八世紀後半か)をつける。左右に葉垂木を渡す。小口のみ金箔押しとし、それ以外は総体に黒漆塗とする。

天井は桐材で素地に墨画で雲龍を描く(頭が左側面を向く)。その上に箔を散らす。

懸魚^{げぎょ}(写真7-29)は中央に菊紋の金具を打ち、樽口形の頭を持つ釘で打ち留める。懸魚左右と下端には葉形を彫り表し、箔押しする。破風裏の羽目板、拝幣束^{はいへいそく}、虹梁は黒漆塗とする。虹梁の絵様は内側に長く伸び、中に漆箔を施す。臺股は金箔押しで、大ぶりで横方向に長く伸びる。内側は上半を花頭形とし、下辺中央に葉形を表し、間を透かす。組物は簡素で金箔押しである。



写真 7-27 獅子神輿

軸部は丸柱四本を立て、吹き抜けとする。組物との間に薄板状の台輪を渡し、その下に四面とも大虹梁を渡し、木鼻のみ漆箔を押して小口を花先形とし、側面に蕨手を薄肉に彫り込む。大虹梁のみやや茶味を帯びた潤み漆を塗り、雲形と間をあげ内側に絵様を長く伸ばす。縁取りと雲形、絵様のみ箔を押す。四本



写真 7-28 軒付の入八双金具

柱は黒漆塗とする。軸部の床は基部の縁板から一段高く作り、二枚矧ぎの床板を張る。基部縁板は側面・上面・下面とも黒漆塗で、中央に出八双金具、四隅に入八双金具、その中間に丸鉾を打っている。八双は素文である。

基部縁板の外縁に朱塗りの高欄をめぐらす。正面側を屋蓋の金具と同様の文様を彫金した蝶番で開閉する構造になる。内側中央通束に菊座の驪金具を打つ。当初から獅子頭を乗せるために造作されたものと思われる。通形の架木、平桁、地覆をめぐらせ、金具は打たない。親

柱は横断面八花形で、頂に二重弁の逆蓮華を彫り表し、黒漆塗とする。四本柱の下端は縁板を貫き、長さ約15cmほどの角型を下方に伸ばすが、下部構造は不明である。

屋根を収める木箱が残置され、蓋表に「寛政四年／壬子七月吉日／館屋根／木造横町」と墨書する。

2 獅子頭 (写真 7-30) 一頭
高 38・0 cm 幅 48・8 cm
奥 46・0 cm

木造、漆塗、目は銅鍛造製で、鍍金する。下顎部を内側から頬へ木製の軸で取付け、動かせる構造になる。



写真 7-29 懸魚



写真 7-31 獅子頭内面



写真 7-30 獅子頭

表面は肉部を朱漆塗、眉を黒漆塗、鬣は黒漆塗または漆箔押しとする。歯は漆箔押し、唇は黒漆塗である。目は大きく飛び出させ、銅板製黒漆塗の瞳に一回り大きい銅板を重ね、縁取りを表す。白目は真鍮板製である。

額から頂部にかけて何重もの皺を彫り出し、その両側に細かにひだを彫り、眉と鬣を表す。いずれも先を巻き込む。鼻を上方に大きく突き出し、鼻の穴を前面に円形に透かして覗き穴とする。側頭部に獣毛を植え付ける。内面(写真 7-31)は全面を朱漆塗とする。その下に鑿跡が残っているのが見える。箱に宝暦五年云々の墨書を残す。(久保智康)



第四節 補記

ここでは、調査時に久保氏が述べた所見をふまえ、事務局よりむすびにかえて若干の補足を加えることとする。

各山車、木造町神輿の従来伝えられた製作年代と、今回の調査で明らかになった鍔金具の製作年代は表7-1のとおりである。この表から、山車・神輿の推定の製作年代と今回の調査で推定された鍔金具の年代は、必ずしも一致していないことがうかがえる。このことについて、調査時に以下の可能性が挙げられた。

- ・安宅車：素木の山車が江戸後期から明治初めの間に造られ、明治時代の間
に鍔金具を追加で施した。
- ・若戎車：先代（もしくはそれ以前）の鍔金具を再現して製作した。
- ・本神輿・花神輿：現存する神輿を製作した時に、先代の神輿に使われていた鍔金具を使用した。

これらのことから、これまで明らかにになっていた山車や神輿の製作年代だけでなく、その前後の足取りについて論ずる余地がでてきたのではないかと。特に、木造町の本神輿や花神輿については、金具の一部に十七世紀まで遡る可能性があるものが含まれていることは、これまでほとんどわからなかった江戸時代前期の岐阜まつりの姿を知る手がかりの一つになるものと思われる。

岐阜まつりの山車や木造町神輿の多くは、江戸から明治期にかけて造られた文化財で、人々によって長年にわたり大切に守り伝えられてきたものである。使用している以上、修理の必要に迫られることはあるが、これからも大切に伝えていけるよう、山車・神輿本体はもとより、鍔金具などの部品にも配慮して修理していくことが求められる。（事務局）

（参考文献）

- 久保智康「鍔金具」『名古屋の山車行事総合調査関連資料集5 名古屋の山車構造と装飾』二〇二〇年
- 久保智康「山・鉾・屋台の鍔金具」『山・鉾・屋台の祭り研究事典』思文閣出版 二〇二一年
- 久保智康「大山祭山車の金工」『大山祭総合調査報告書』大山市教育委員会 二〇〇五年
- 久保智康「大垣祭輿の金工」『大垣祭総合調査報告書』大垣市文化遺産活用推進事業実行委員会 二〇一四年

表 7-1 岐阜まつり山車・神輿の製作年代

山車・神輿の名称	山車・神輿の製作年代 ※カッコ内は根拠	鍔金具の製作年代 (最も古いもの)
安宅車	安政～明治21年 (1860～1888) 頃 (安政地震以降～からくり人形新調および構造・様式)	明治時代
若戎車	嘉永2～5年 (1849～1852) 頃 (からくり人形製作年および構造・様式)	19世紀半ばから明治24年 (1891)
清影車	明治37年 (1904) (「玉井町」掛札)	—
踊車	明治39年 (1906) 以降 (『稲葉神社祭礼山車引出之図』および構造・様式)	—
本神輿	文化11～文政10年 (1814～1827) (鳳凰収納箱墨書および基壇墨書)	17世紀前半もしくはそれ以前の可能性
花神輿	安永3～天保2年 (1774～1831) (花神輿鈴箱墨書および基壇墨書)	江戸時代初期あるいはそれ以前
獅子神輿	宝暦5～寛政4年 (1755～1792) (獅子頭収納箱墨書および館屋根収納箱墨書)	18世紀後半か

表 7-2 安宅車 銚金具一覧

部位	形状	枚数	意匠	技法	特記事項
上山高欄					
(架木)	正面蔵手／入八双	2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
	中間：出八双	2+3 + 3×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×4	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
(平桁)	中間：出八双	2+3 + 5×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×4	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
	鼻先：桶形入八双	2×4	小口：笹竜胆 側面：牡丹葉形唐草	小口：紋を透彫、蹴彫、葉脈毛彫、黒色 地板 側面：透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
(地覆)	正面／桶形入八双	2	小口：輪宝 側面：牡丹葉形唐草	小口：紋を透彫、蹴彫、葉脈毛彫、黒色 地板 側面：透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
	中間：出八双	5×2 +3	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×4	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
	鼻先：桶形入八双	2×4	小口：輪宝 側面：牡丹葉形唐草	小口：紋を透彫、蹴彫、葉脈毛彫、黒色 地板 側面：透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
(斗束)	桁形：帯板	4+3 + 2×2	菊花	透彫、毛彫	肩に列弁透し金具 外側三方に回す
	地覆上：方形	4+3 + 2×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	肩に列弁透し金具 外側三方に回す
(嫁束)	方形	2+3 ×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
前棚高欄					
(架木)	正面蔵手／入八双	2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
(平桁)	正面：出八双	2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	内側に折り曲げる
	中間：出八双	1×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
(地覆)	正面：桶形入八双	2	小口：菊花 側面：牡丹葉形唐草	小口：紋を透彫 側面：透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
	中間：出八双	2+1 ×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×3	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
前棚縁板	中間：出八双	3+1×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2+1×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
前棚欄間					
(上框)	中間：出八双	3+1×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
	端：入八双	1×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
(下框)	中間：出八双	3+1×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
	端：入八双	1×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
台輪	鼻先：小口に方形板 と筒形	4	素文	方形板は銅版、筒形は鉄鍛造	
輪がけ	出八双	10×2	素文	鉄鍛造	
台輪正面	四稜花形座金具	2	素文	鉄鍛造	

表 7-4 清影車 銚金具一覧

部位	形状	枚数	意匠	技法	特記事項
前棚高欄					
(擬宝珠柱)	擬宝珠	4	素文	真鍮鍛造鍍金	上山高欄の擬宝珠は木造
台輪	鼻先：桶形入八双	4	小口：木瓜形透し	鉄鍛造	
輪かけ	入八双	8×2	素文	鉄鍛造	

表 7-5 踊車 銚金具一覧

部位	形状	枚数	意匠	技法	特記事項
台輪	鼻先：方形筒形	4	素文	鉄鍛造	当初から小口板は無し



表 7-3 若戎車 鋳金具一覧

部位	形状	枚数	意匠	技法	特記事項
鬼板	菊花	1	菊花	薄肉打出し、型鑿、なめくり鑿	前
	五三桐	1	五三桐	薄肉打出し、毛彫	後 鬼板上半欠失
唐破風					
(裏甲)	中央：出八双	1×2	通形唐草	魚々子地、蹴彫、葉脈毛彫	
	左右：出八双	2×2	通形唐草	魚々子地、蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×2	通形唐草	魚々子地、蹴彫、葉脈毛彫	軒側に折り曲げる
(茅負)	中央：	1×2	通形唐草	魚々子地、蹴彫、葉脈毛彫	
	左右：	2×2	通形唐草	魚々子地、蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：	2×2	通形唐草	魚々子地、蹴彫、葉脈毛彫	軒側に折り曲げる
(破風)	中央：入八双	1×2	牡丹・牡丹葉形唐草	牡丹：薄肉打出し、花脈は細い蹴彫 葉：蹴彫、葉脈毛彫	
	左右：出八双	2×2	牡丹・牡丹葉形唐草	牡丹：薄肉打出し、花脈は細い蹴彫 葉：蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×2	牡丹・牡丹葉形唐草	牡丹：薄肉打出し、花脈は細い蹴彫 葉：蹴彫、葉脈毛彫	
軒					
(裏甲)	中間：出八双	2×2	通形唐草	魚々子地、蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×2		魚々子地、蹴彫、葉脈毛彫	
(茅負)	中間：出八双	2×2	通形唐草	魚々子地、蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×2	通形唐草	魚々子地、蹴彫、葉脈毛彫	
	中間：出八双	1×2	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	
垂木先	先端：桶形入八双	18×2	小口：隅花菱 側面：通形唐草	魚々子地、蹴彫、葉脈毛彫	小口金具、左列4枚、 右列一枚欠失
四本柱	上端：出八双	4×4	牡丹葉形唐草 入八双形に桶に雲	唐草：透彫、蹴彫、葉脈毛彫 入八双：魚々子地、桶を薄肉打出し、 雲は蹴彫	葉は丸みを持ち、古様ながら 葉先は下方にやや尖る 雲に桶は独自の意匠か
	中間：出八双	4×4	牡丹葉形唐草	透彫、蹴彫、葉脈毛彫	葉は丸みを持ち、古様ながら 葉先は下方にやや尖る
上山高欄					
(架木)	正面／出八双	2	菊花に唐花	毛彫、唐花の輪郭のみ蹴彫	唐草中央に四葉形
	中間：出八双	2×2+2	菊花に唐花	毛彫、唐花の輪郭のみ蹴彫	
	鼻先：桶形入八双	2×4	小口：梅鉢 側面：通形唐草	小口：魚々子地、梅鉢は毛彫 側面：魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	加納天満宮に一時 貸出していた
(平栱)	正面／入八双	2	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
	中間：出八双	2×2+2	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
	鼻先：桶形入八双	2×4	小口：梅鉢・四隅唐草 側面：通形唐草	小口：魚々子地、梅鉢は毛彫り、唐草は 蹴彫、葉脈毛彫 側面：魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
(地覆)	正面／出八双	2	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
	鼻先入八双	2			
	中間：出八双	2×2+2	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
	鼻先：桶形入八双	2×4	小口：梅鉢・四隅唐草 側面：通形唐草	小口：魚々子地、梅鉢は毛彫り、唐草は 蹴彫、葉脈毛彫 側面：魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
上山縁板	中間：出八双	2×2+2×2	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×4	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
上山欄間					
(上框)	中間：出八双	2×2+2×2	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：出八双	2×4	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
(下框)	中間：出八双	2×2+2×2	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×4	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
前棚高欄					
(地覆)	正面／出八双	2			
	鼻先入八双	2×2			
	中間：出八双	1×2	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×2	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
擬宝珠柱	上端：擬宝珠	2	素文	打出	
	下端：出八双	2	唐草、根巻は列弁	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
前棚縁板	中間：出八双	2+1×2	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×3	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
前棚支輪下欄間框					
(上框)	中間：出八双	2+1×2	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：出八双	2×3	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
(下框)	中間：出八双	2+1×2	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
	両端：入八双	2×3	通形唐草	魚々子地蹴彫、葉脈毛彫	
台輪	鼻先：方形筒形	4	素文	鉄鍛造	当初から小口板は無し
輪かけ	出八双(T字形)	2×2	素文	鉄鍛造	
台輪正面	四稜花形座金具	2	素文	鉄鍛造	